

山梨県内におけるまちづくり活動の発現要因と継続要因の調査

山梨大学 学生会員 ○伊地田龍仁

山梨大学 正会員 大山勲

1.背景

近年、地方では地域資源を活かす住民協働の内発的な取り組みが期待され、景観まちづくり活動を行う団体も増えてきている。まちづくり活動を活発に行う地域がある反面、まちづくり活動が発現しない地域、行政計画等のワークショップで契機がつくられても行政の事業が終われば活動が衰退してしまう地域も少なくない。

2.目的

本研究は山梨県内の景観まちづくり活動の先進的事例を対象として、その活動の発現要因と、その活動が継続した要因を明らかにすることを目的とする。今後多くの地域で景観まちづくりの活動が発現・継続することを支援する方策検討の知見としたい。

3.研究方法

対象団体は山梨県が主催するまちづくり活動団体の交流場である美しい県土づくり推進会議に参加しているNPOおよび住民活動団体とした。その全て76団体にアンケートを配布し、22団体から有効回答を得た。さらに、その中から(i)住民によるまちづくりの活動を主としていること、(ii)回答率が一定の基準を満たし、活動が現在も意欲的に継続して行われていることを条件にヒアリング対象を選定してヒアリング調査を行い、各団体の発現要因・継続要因の抽出を行った。

4.結果

4-1 山梨の景観まちづくり団体の活動内容と規模

アンケートの結果から、団体の活動概要をまとめる。景観づくりを目的としている団体であるが、景観を契機として、景観活用（観光や情報発信）やその他の活動（農業活性化や地域コミュニティの再生など）、多様

な活動に展開しているようである。

表1. 活動概要

活動内容	団体数	景観づくり	景観活用	その他
地域でのイベント開催、参加	7		●	
自然環境の保全	5	●		
地域での観光案内	4		●	
歴史文化の継承	3	●		
地域清掃	3	●		
看板による景観阻害の勧告	2	●		
都市農村交流、またその促進	2		●	
地域の観光案内	2		●	
自然体験	2		●	
農作物での地域ブランド作り	2			●農業
湖での自主ルール策定	1	●		
景観を阻害しない製品開発	1	●		
景観マップの作成	1		●	
障がい者就農支援	1			●農業
地域誌の発行	1		●	
子育て支援	1			●生活
地域コミュニケーションのためのインターネット掲示板運営	1			●コミュニケーション

団体の活動年数と構成人数について、15団体から有効回答が得られた。活動年数は10年以下の団体が10団体と大半を占めていた。構成人数は10人以下が多いが、様々な人数構成にわたっている。

表2. 活動年数

活動年数	団体数	
10年以下	11	73%
11-20年	3	20%
20年以上	1	7%

表3. 構成人数

構成人数	団体数	
0-10	6	40%
11-20	3	20%
21-50	3	20%
50以上	3	20%

4-2.まちづくり活動の発現要因・継続要因

団体の代表者にヒアリング調査を行った。ヒアリング内容は団体の活動の経緯と活動内容の詳細である。ヒアリングで得られた情報を分類し、「団体として活動するに至った要因（発現要因）」と「現在も活動を継続できている要因（継続要因）」の抽出を行う。今回ヒアリング調査を行った団体は以下の4団体である。

キーワード 景観まちづくり まちづくり活動 発現要因 継続要因

連絡先：〒400-8510 山梨県甲府市武田4-4-37 山梨大学生命環境学部地域社会システム学科 Email:ooyama@yamanashi.ac.jp

4-2-1 ヒアリング結果 団体 A

活動概要、発現要因、継続要因を表にまとめた。

表 4. 団体 A の活動概要

設立年数	2010
活動年数	5
活動概要	<u>古道のボランティアガイド</u> →国土交通大臣賞をとったため視察に来る団体などが増えた。そのためボランティアガイドをしている <u>古道の美化・自然環境の保護</u> →ビオトープの管理や、清掃活動などを行っている <u>古道の歴史・文化の継承</u> →地域で行われている奉納相撲について協力参加している。 地域の子供には櫓のことを教えるためにガイドブックを作成している。

表 5. 団体 A の発現要因

・「駅南整備計画の存在」: 地区付近にある駅の南口の整備計画が行われていた。駅南地域の住民はこれを契機に地域について考えるようになった。 ・「区民全戸へのアンケート実施」: メンバーとなる区民全戸にアンケートを実施した。普段は区長や前区長などの少人数で地域について話し合いをするのだが、ここではアンケートを実施することにより住民の要望を直接すべて把握することができた。 ・「住民の改善意識」: 実施されたアンケートでは地域改善に関する要望がおおく寄せられていたため、日ごろから住民が地域に改善してほしいと思っていた。 ・「地区での団結力」: メンバーは区民全員となり地区における団結力があつた。整備案を考える際に地域のフィールドワークを行った。住民に声をかけたら20人程度集まったことから団結力がうかがえる。 ・「住民提案を行政が承認」住民からの意見が提出されたとき、土木科では取り合ってくれなかったが、提案の仕方をかえて観光課に持っていたところ許可が下りて実現に至ったもともと市は古道の整備に協力的ではなかった。最初は意見が通らなかったが、駅から根津記念館への道のりとして整備するという物語で提案したら申請が許可された。 ・「誇りの持てる歴史文化の存在」: 道を整備する前に行われたフィールドワークで、地域住民全体で地域について勉強した。行政の歴史に詳しい人のガイドで地域を歩いたり、古文書を読んだり、有志の住民で勉強会をひらいていた。地域の歴史を知ること歴史文化の継承を強く思う契機となった。
--

表 6. 団体 A の継続要因

・「地域の歴史の発見と誇りの醸成」: →「地域のフィールドワーク実施」: 有識者の案内(行政)で地域を散策し自分たちの住んでいる地域について知識を深める機会をつくった。この取り組みにより、はじめて住民に地域の歴史が認識された。 →「メディア露出」: 藤巻さんが自らマスコミ連絡をとり、取り上げてもらった。メディアに自分たちの地域が露出することによって誇らしくなった。 →「国土交通大臣賞受賞」また官民協働の例として国土交通大臣賞を表彰されたのも要因の一つ。 →「ものづくりへの参加」: 地域住民自ら古道の板塀制作をしたため、自分たちで作ったという達成感と愛着がわいた。 ・「無理をしていない」: かのがわ古道整備の時は空いている倉庫を借りて作業をした。そのとき当番などを作ったりせず、参加を強制しなかった。 ・「住民の歴史文化保全に対する意識・意欲が高い」: 古道ということが分かった時にコンクリートで道を整備をしてしまうのではなく、昔の風景を作ろうという取り組みになった。アンケートでは安全のために道を整備するというのが主だったが、古道らしく整備することとなった。 ・「住民の根回し」: 土地交渉などで住民同士で協力してくれと頼み、手続きは行政が行うといった形でスムーズに活動が行われた。

団体 A では、発現以前から、住民が地域の現状を改善したいと危機感を持っており、公共事業を契機として行政が住民に地域づくりに対する幅広い意見を聞くワークショップの場を設けたことが発現を促した。さ

らに、地域住民の意見を収集する区民全戸へのアンケートの実施により、地区の価値ある資源や改善点が明らかになるが、それに留まらず住民で地域を歩き勉強したことにより、歴史や文化について多くの人が実感として認識を深めた。地域の道祖神や祠など何気ないものも歴史的価値があるのだと気づき、住民発案の事業（古道と水路を活かした景観整備）の行政へ提案・申請をするまでに至った。

団体 A は区民全員が活動に参加している稀な団体である。継続していく上では「無理をしない」ことを心がけていた。古道として整備が決まった際に板塀は地域住民で制作した。板塀制作に関しては当番などなく、自由に参加できるものだったため活動がメンバーの負担にならなかった。さらにメディアへの露出やまちづくり活動が表彰されたことにより、地域への誇りが強まり継続につながっている。

4-2-2 ヒアリング結果 団体 B

団体 B の活動発現の契機として旧国道の町道移管の際に町道整備に関するワークショップが行われた。そこが住民のまちづくりに対する意見を話し合える場となった。また住民が地域を景観的にも観光としても良くしていきたいと思うに至り、町道整備が終わった後も活動を続けたいということで団体が立ち上がった。

表 7. 団体 B の活動概要

設立年数	2009
活動年数	7
活動概要	<u>地区の歴史や資源を発掘し、顕在化する取り組み</u> 地区の歴史や景観への理解を深める勉強会の実施 地区の資源を紹介する景観マップの作成 <u>河口らしさが感じられる風景づくりの取り組み</u> 旧国道137号(河口浅間通り)の町道移管に伴う整備の提案 寺川沿い散策路整備に対する散策路づくり住民プランの提案 旧消防詰所の修景整備の実施 <u>地域イベントで交流促進・活性化を図る取り組み</u> 河口浅間神社で行われる例大祭での盛り上げ企画 富士山世界文化遺産登録決定 河口浅間神社記念行事の企画 コンサートによる地域の盛り上げ企画 地域清掃の企画

表 8. 団体 B の発現要因

・「公共事業を契機としたワークショップの開催」: 旧国道の町道移管時に住民から町道の整備に対してそのまま町道にするのではなく、明治の頃のようにせせらぎが流れるようにしたいという要望があり、県に申請したところ県から許可が下りたのでワークショップが開催された。そこでまちづくりに対しての住民の意見が聞くことができた。これが住民の意見を引き出す場の創出となった。 ・「住民が親しんでいる歴史文化の存在」もともと河口地区には浅間神社があり、歴史文化があつた。神社での祭りは毎年地域の人が神輿を担ぎ、出店が出るということが昔から行われており、地域で育った人は愛着を持っていた。しかし地域外で働いている人が年に1度の祭りに来なかったり、子供が興味を示さず来なかったりということがあり、文化の継承に危機感を覚えていたことが発現につながった。

継続の要因としては本業があるため活動参加に無理をしないことを心掛けている。世代交代も意識的に進めているようで、一線を退いたらサポートする役に回るよう意識している。また会長の人柄や活動資金が安定していることも要因としてあげられる。

表 9. 団体 B の継続要因

・「少人数」: 活動している人数が主に10人程度、多くなりすぎて活動に支障がでないように気を付けている。
・「世代交代を意識的に進める」: 高齢のメンバーが活動の負担にならないように、初代の会長などは相談役として一線を退いてもらっている。自分たちも引き継ぐ次期になったら一線を退いてサポートをしようと話している。具体的な年は決められていない
・「活動資金の確保」: 資金面では区から年20万円、行政からは80万円の補助をもらっているため資金面では安定している。
・「地域住民の地域への誇りの醸成」: 地域外にいて戻ってきたときに富士山と河口湖が見える地元は唯一無二のものだと実感していた。視察に行った際でも地元の資源を褒められ認識を改めた。
・「無理をしていない」: メンバーそれぞれが本業や家庭があるため活動に参加できない場合がある。そのため活動の集会も強制や当番は無く、来れる時に来れる人が行うようにしている。そこで話しているメンバーが非常に楽しそうだった。
・「メンバー勧誘がしやすい状況」: 地域外からの移住者を受け入れる地域性と、観光協会でのつながりがあるため新規メンバーが獲得しやすい。
・「会長の人柄・家柄が良い」: 地元出身の会長の影響が大きく、会長は地域に古くからある良い家柄で財産区も管理しており、地元での交友関係は非常に広いので活動が円滑に進んでいる。また会長が資産を持っており、活動で寄付をしてくれることがあるので助かっている。

4-2-3 ヒアリング結果 団体 C

表 10. 団体 C の活動概要

設立年数	2007
活動年数	8
活動目的	自然豊かな黒平で体験活動や環境教育等を通して、人材育成及び過疎高齢化に対する調査研究や施策提言、地域活性化支援、里山再生、環境保全に寄与すること
活動概要	・自然環境保全活動・耕作放棄地再生・黒平いきいき里山整備・自然体験教室・水源林観察会・山の暮らしの豊かさを守り、過疎に悩む山間集落の未来を切り開く活動

表 11. 団体 C の発現要因

代表者の個人出的な思い意欲が強く活動が成立している 黒平で空き家や放置されている施設があったため利用できた。 集落の7、8割以上は空き家 自然が豊かで近くに溪流が流れている。 登山客が定期的に訪れていたため需要が多くあった。
--

表 12. 団体 C の継続要因

活動を代表を中心に行っている 活動の資金は主に会費といこいの里の管理費で行っている。 またセブンイレブンなどの助成金に応募したりもしている 黒平は非常に豊かな自然が多いため魅力がある いこいの家は宿泊施設として使えるようになっており、一人当たり泊660円と非常に安価に設定している。そのためリピーターもいる 東京の大学と交流もあり年二回ほど黒平でイベントを行っている
--

団体 C の発現、継続は個人の熱意によるところが大きいといえる。発現は集落の世帯数激減によって代表が集落消滅の危機を感じ、自然保護や自然体験を中心に活動を開始した。現在は地域で活動はしているが、その地域で住民が居住しているのは3軒と少ない。そのため、外部の人を呼び自然体験という形で1年を通して活動している。

4-2-3 ヒアリング結果 団体 D

表 13. 団体 D の活動概要

設立年数	2003
活動年数	12
活動概要	2003 歌声喫茶「灯」 2003 どんと焼きナイトフィーバー 2004 ひとつおくれのひな祭り GRAY人(グレイト) の活動を主にやっている。現在は外国人観光客に向けて英語の地図、英語の案内マニュアルを店ごとにおく試みをしている。

表 14. 団体 D の発現要因

・「開催イベントの成功」: 自分たち発案のイベントで楽しむことができ、活動を続けていきたいという意欲に繋がった。毎年開催されている市政祭があり、そこで商店街として出店などをしていた。住民があまり楽しむものがなかったため、メンバーの一人の提案で歌声喫茶を行うことになった。それから毎年持続して活動をしていこうと団体を立ち上げた。
・「地域の主婦による組織」メンバーは商店街に住んでおる人がほとんどで主婦同士は交流が深かった。メンバー勧誘は知り合いが知り合いを連れてくるというような流れで、メンバーの招集は容易だったことから地域の団結力がうかがえる。
・「地域イベントへの参加」: 小正月のどんと焼きや、市政祭など定期的イベントが行われており、もともと商店街として参加していた。それに加えてイベントをしていくため企画・実行がしやすかった。

表 15. 団体 D の継続要因

・「団体設立以前のメンバー内交流の存在」: 活動の契機となった話し合いも井戸端会議のような立ち話から始まったというように、メンバーがリラックスして話をしている。そのため最近始めたイベントでもメンバーが気軽に提案できているようで、それにほかの人が賛同して進めているという形をとっている。
・「無理をしていない」: メンバーの多くは主婦なので家事をやらなければならない。そのため活動の参加は強制当番制などではなく来れる時に来れる人が来るといった形で行われている。お互い様を心掛けている。メンバー各々がやれることをやり、やれないことをやろうとしていない。無理をしていない。
・「楽しむことを目的とした活動」: 自分たちが楽しむことを大前提としている。具体的な目標はなく地域活性化なども掲げておらず、活動を行っている上で負担を感じないように心掛けている。

団体 D の発現はメンバーの1人によるイベント開催の提案だった。そのイベントで住民が楽しむことができ以後も続けていきたいという意欲につながった。また市で行われるイベントで住民が楽しめていなく、その不満を話し合う場があった。継続していく上ではメンバーが楽しむことが目的となっているため活動以外の生活に負担がかからないよう気を付けている。また

もともとメンバー内の主婦同士交流があったため気軽に活動提案できている。

5. まとめ

(1) 発現要因

i) 地域住民の意見を話し合える場の存在

3 団体で住民の地域に対する思いを自由に話し合う機会が存在していた。住民が地域に対して個人で改善点を持つのではなく、その意識を共有、提案できる場の存在が発現要因の一つといえるだろう。

ii) 活動以前の地域住民の交流

活動が起こる以前から、住民同士で交流が深い場合はメンバー勧誘や設立の会議などが円滑に進んでいる

iii) 公共事業の存在

活動を行う契機として公共事業も重要であった。地域での公共事業を住民に地域を考えてもらう契機とするために積極的に話し合いの場を設けた行政の働きが大きい。それによって住民の中にまちづくり意識が芽生え、発現に繋がっている。

IV) 地域にある資源の再認識

地域に埋もれていた歴史や文化を発見し、それらを保護、活用しようという動機が発現につながった。さらに地域の歴史をフィールドワークで学ぶことで誇りが生まれ活動を起こす後押しになっていた。また自然に対してもかけがえのないものだとして認識することで保護活動へ踏み切る例もあった。

V) イベントによる満足

単発的・試行的に自分たちが楽しむイベントを開催した。そこでメンバーが効果を実感したことが発現要因となった。

VI) 地域イベントの存在

地域でもともと行われているイベントがあり、活動を行う土台ができていたことが要因としてある。

(2) 継続要因

i) 地域に対する誇りの醸成

地域で活動していく中で、地域の歴史や文化を勉強し地域への誇りが強まっていた。また、メディアに取り上げられることや活動が表彰されることによって地域に対する誇りが強まっていった。誇りが強まることによって活動を続けていく意欲に繋がった。

ii) ものづくりへの参加

地域の景観整備のために住民の手作りで整備を行うことによってより地域への愛着が増す。

iii) 無理をしていない

まちづくり活動をしていく中で会議やイベントなどの参加を当番などにはせず参加を強制しなかった。メンバーの本業や家庭を優先し活動が負担に感じないように気遣われていた。ヒアリングを行った団体でほとんどがこのことについて気を付けていた。活動をメンバーの負担にしないことが継続要因である。

IV) メンバー自身が楽しむことを目的としている

大きな目標を掲げず、身近な目標を設定することで負担を感じず活動が持続できている。

V) 視察・現場での体験

類似の活動をしている先進地へ視察を行うことや、フィールドワークを行っている。視察で他地域に行った時には、自分たちにしかない資源を改めて知ることができ、自分たちでも出来そうな工夫を見ることが活動に対する意欲が起こっている。

VI) 住民を主役にする

行政と協働で活動していく際に住民が主導となり、積極的に動ける環境をつくっている。そのため自らの活動に自負や責任感が生まれている。

VII) 住民相互の根回し

行政との連携で整備を行う際に住民が土地交渉を積極的に行うことで、活動の障害にならず円滑に活動を進めることができています。

VIII) リーダーの人柄、家柄

会長がその地域出身であり、資産を多く持っている。さらに地域での交友関係が広いことメンバー外の人と係わって活動する際に円滑に事が進む。

6. 今後の課題

本研究では4 団体に対してヒアリングを行い発現要因、継続要因の抽出を試みた。だが山梨県内で行われている住民によるまちづくり活動を行っている団体はまだ多くある。今回の研究は発現・継続要因の可能性として提案し、これからも多くの団体に対し発現、継続要因の把握を行い、活動や環境の違いによる分析等、要因の体系化を目指したい。